

秩父宮会の御大典奉祝事業

秩父郡の歌

〜未来へ受け継がれる秩父のこころ〜

一般社団法人
秩父宮会

収録内容

① CD

- 1：ソプラノ独唱
- 2：ピアノ伴奏（カラオケ）
- 3：混声四部合唱
- *ボーナストラック
4：童謡「秩父の宮さま」

作詞：北原白秋
作曲：山田耕筰

② 秩父郡の歌 楽譜（独唱・混声4部合唱）

③ 秩父郡の地図（大正14年製作）

秩父郡の歌 記憶保存事業

プロデューサー：根岸 秀行
録音：STUDIO JOY
秩父宮会事務局：新井 君美

秩父郡の歌

一 見よ三峰と両神と

武甲の嶺の雄々しさを

見よ荒川の清き水

都にそそぐ勢ひを

秩父 秩父 わが秩父

二 和銅ささげし昔より

人の心のすくよかに

み山をうづむ杉檜

里に織りなす秩父絹

秩父 秩父 わが秩父

三 いとも畏こし皇子の宮

光栄ある御名に負ひましつ

尊き誉この光

世に輝やかせいざ共に

秩父 秩父 わが秩父

神も

あまたなり

みゆかり

勢津子

秩父のさとわ
みよ栄えむ

神垣も新になりて みゆかりの
秩父のさとわ いよよ栄えむ

秩父宮妃勢津子殿下 御歌



「秩父郡の歌」について

今から98年前の大正11年6月25日、大正天皇の第二皇子、淳宮雍仁親王殿下が成年に達せられた折り、当地の地名より新たに「秩父宮家」をご創建あそばされました。「秩父宮」という宮号は、皇居からみて西北に位置する秩父嶺が武蔵国の名山であり、荒川の源流域にあって神話に繋がる古い歴史を有する地域であることに由来すると伝えられています。同年11月26日、秩父宮殿下には初めて秩父地方に御成りあそばされ、まず秩父神社にご参拝の後、広く秩父郡内をご視察あそばされました。このご慶事を長く後世に伝えるべく、当時この11月26日をもって「秩父郡の日」と定めています。

翌大正12年11月10日、大正天皇の御名により「国民精神作興ニ関スル詔書」が渙発されました。この詔書は、教育勅語や戊申詔書の流れをひき、第1次世界大戦後の個人主義や欧化主義の風潮、社会主義の台頭に対処し、関東大震災後の社会的混乱を鎮静するため、国民精神の振興を呼びかける内容になっていました。

こうした時代的要請を受け、秩父郡教育界では郡民の教育意識の高揚を図ることを目的として、「秩父郡誌の編纂」更には「郡歌の制定」を主要事業の柱に据える中で、特に秩父宮家との深い御縁を通じて、皇室と郡民との精神的紐帯をより強固なものにしたいという意図が働いていたことは想像に難くありません。

いち早く大正14年に「秩父郡誌」が発行され、その後、昭和3年9月の秩父宮両殿下のご成婚、同年11月の昭和天皇の即位の礼・大嘗祭などのご慶事を経て、昭和4年3月17日、秩父郡教育界では昭和の御大典記念行事として以下の「教育是」を制定しています。

「教育是」

けいしんすうそ たか ちゅうせつこうてい いた
一、敬神崇祖ノ信念ヲ高メ忠節孝悌ノ誠ヲ致スヘシ
しつじつこうけん こいねが こうじょうしんしゆ
一、質実剛健ノ精神ヲ尚ヒ向上進取ノ実ヲ挙クヘシ
きんけんりつこう やしな きょうそんどうあい な
一、勤儉力行ノ慣習ヲ養ヒ共存同愛ノ美ヲ済スヘシ

本紙付録の『埼玉縣秩父郡明細地圖』（大正15年10月6日発行）にある通り、当時の秩父地域は、秩父町、小鹿野町をはじめ2町30村からなり、郡民が心をひとつにして歌うことのできる郡歌の制定は悲願でもありました。そうした願いが結実する形で、作詞は佐佐木信綱、作曲は信時潔と当代一流の芸術家の手により、昭和3年9月21日に「秩父郡の歌」が制定されたことが、当時の毎日新聞・埼玉版に報じられています。ドイツ古典派を思わせる簡素で重厚な旋律の上に、武甲山をはじめとする秩父山塊と荒川の清流、秩父銘仙や林業など当時の地場産業を織り込み、更には深い御縁を戴いた秩父宮家を顕彰する内容に仕上がっています。

当時、この歌は広く秩父郡内全域で老若男女に愛唱されていました。昭和20年の敗戦以降、公の場で歌うことが自粛されるようになりました。これはアメリカを中心とする占領国軍GHQ主導による教育改革により、「秩父郡の歌」の制定の拠り所でもあった「国民精神作興ニ関スル詔書」が、昭和23年6月19日、衆参両院において教育勅語などと共に排除・執行確認の決議がなされた影響によるものと考えられます。その後、昭和25年には秩父町が埼玉県下七番目の市となり、昭和35年には秩父市歌も新たに制定されました。この間、郡内の町村合併が進み、その後の平成の大合併を経て、現在は秩父市・横瀬町・小鹿野町・皆野町・長瀬町・東秩父村の一市四町一村からなる地域へと様変わりしています。

私ども一般社団法人秩父宮会は、秩父宮両殿下のご遺徳を長く後世に伝えることを目的として昭和28年に設立された団体であり、平成14年以降、秩父市役所より秩父神社に事務局を移し、秩父宮の冠を戴く各種スポーツ大会の開催をはじめ、秩父宮殿下の随筆集等の刊行、秩父宮記念市民会館内の御肖像プレートの制作など、秩父宮両殿下の顕彰事業に努めて参りました。今般、新たな時代の始まりにあたり、報本反始の志をもって、凡そ一世紀前に制定された「秩父郡の歌」を復刻し、21世紀を生きる秩父郡市民の皆様にお届けすることと致しました。

制作過程において奇遇にも発見することができた信時潔の手書きによる原譜より正式に楽譜を調べ、秩父在住のピアニストである鈴木啓三氏の伴奏と菌田真木子氏のソプラノソロ、更には秩父地域に縁を持たれる8名の歌手の皆様のご協力のもと、混声4部合唱の収録も叶いました。CD制作に要した費用は本会会員や地元企業、更には本事業の趣旨にご賛同戴いた多くの皆様、また秩父神社・三峯神社・寶登山神社からの過分なるご援助のもと実現の運びとなりました。この懐かしい故郷の歌を通じて、深い御縁を戴く皇室の弥栄をお祈り申し上げますと共に、郷土秩父を見直す機会になることを願って止みません。

結びにあたり、CD制作についてご尽力を賜りましたご関係皆様様に衷心より感謝を申し上げますと共に、秩父郡市の更なる発展を心より祈念申し上げます。

令和御大典記念事業

「秩父郡の歌」CD制作を祝って

一般社団法人 秩父宮会会長 菌田 稔

「令和」の御代替わりという、わが国にしかあり得ない時代の改まりに浴して、昨年以来の新帝即位の御大典に続き、本年4月19日に齋行された秋篠宮家立皇嗣宣明の儀をもって芽出度く一連の盛儀が整いました御事先ずは何よりとお慶び申し上げます。本宮会にとりましても、秩父宮家という昭和の御代に連なる尊い御縁りを今更に改めて忝うし、茲に謹みて本日恒例の秩父宮祭をご奉仕申し上げますと共に、記念すべき奉祝事業として制作致しました「秩父郡の歌」CD作品をお届けする次第です。

本作品は、奇しくも昭和3年(1928)という、昭和帝即位の御大典が齋行され、しかも同年九月には秩父宮家御成婚という、当時の秩父郡民の沸き立つ歓びのさなかに誕生した素晴らしい郡歌です。

さすがに当代一流の歌人、佐佐木信綱先生の歌詞は、簡潔にして雄渾。近代洋楽界を代表する信時潔先生の作曲は、誰にでも歌いやすく爽快。

今回のCD制作に当たっては、信時先生直筆の原譜を尊重して、ピアノ伴奏も独唱も合唱も、すべて地元出身者による手造りの作品となりました。大いに活用して故里に歌声が湧き立つことを祈ります。

秩父郡の歌 作詞

佐佐木信綱 ささきのぶつな (1872年—1963年)



伊勢国鈴鹿郡石薬師村（現在の三重県鈴鹿市石薬師町）に1872年（明治5年）、歌人・国学者として高名な佐々木弘綱の長男として生まれる。5歳より父の教えを受け『万葉集』、西行の『山家集』の古歌を暗誦し、6歳にして作歌する。東京帝国大学文学部古典科に進み、1890年父と共編で『日本歌学全書』の刊行を開始する。1896年森鷗外の『めざまし草』に歌を発表し、歌誌『いささ川』を創刊。また、落合直文、与謝野鉄幹らと新詩会をおこし、新体詩集『この花』を刊行する。1899年に父の号、竹柏園（なぎぞの）を受け継ぎ短歌結社「竹柏会」を主催し、歌誌『心の花』を発行する。短歌革新運動の過渡期において“独自性の尊重”を方針に掲げ、木下利玄、川田順、九条武子、柳原白蓮など多くの歌人を育成した。『思草』をはじめ数々の歌集を刊行した。1917年に御歌所寄人となり、『明治天皇御集』の編纂や貞明皇后をはじめ皇族方に和歌を進講し、戦後は歌会始の選者をつとめた。

国文学者としては、父弘綱以来の家学を継いで、古典文学（特に和歌文学）の近代的な研究と、万葉学の樹立を目的とした研究の体系化に、不朽の業績を残した。前者には『日本歌学史』『和歌史の研究』『国文学の文献学的研究』等、後者には『校本万葉集』『新訂新訓万葉集』『万葉集事典』等の名著がある。また、東京帝大で優秀な後進を育てる傍ら、古典籍の重要な伝本を数多く発見・紹介・複製刊行して学会に多大な貢献をした。

歌謡の分野でも『梁塵秘抄』『琴歌譜』等を発見し紹介している。唱歌の作詩なども多く行い、「夏は来ぬ」は広く知られている。本来の苗字は「佐々木」と記していたが、信綱が訪中の折、中国には「々」の字が存在しないことを知ったため、それ以後は「佐佐木」に改めたという逸話が伝えられている。

1934年帝国学士院会員。1937年文化勲章受章。同年帝国芸術院会員となる。

秩父郡の歌 作曲

信時 潔 のぶとき きよし (1887年—1965年)



1887年（明治20年）に牧師・吉岡弘毅の子として大阪市北区中之島に生まれ、幼少より賛美歌に親しんだ。

市岡中学（現在の大阪府立市岡高等学校）を経て、1906年東京音楽学校（現在の東京藝術大学）に進む。

チェロと作曲をハインリッヒ・ヴェルクマイスターに、対位法と和声をルドルフ・ロイテルに学び、同校研究科作曲部を修了した。1915年に28歳の若さで助教授となり、20年には文部省派遣在外研究員としてベルリンに留学。当地ではゲオルグ・シューマンに作曲を、ヴィリー・ディケルトにチェロを学び、十二音技法をはじめとするヨーロッパ最新の音楽思想の洗礼を受けるが、むしろバッハに代表される質実剛健な古典音楽に傾倒した。帰国後は東京音楽学校教授となり、同校の本科作曲部（現在の東京藝術大学音楽学部作曲科）創設に尽力し、弟子には下総皖一、橋本國彦、高田三郎、大中恩などがいる。

主な作品には、交声曲『海道東征』、歌曲集『沙羅』、国民唱歌『海ゆかば』（大日本帝国海軍の将官礼式用儀制曲『海ゆかば』とは同名異曲）、『紀元二千六百年頌歌』、ピアノ組曲『木の葉集』、合唱曲『紀の国の歌』、『鎮魂頌』などがある。『沙羅』は現在でも愛唱され、多くの合唱曲も演奏機会が多い。芸術音楽のみならず文部省唱歌『電車ごっこ』等を作曲。戦前戦後を通じて学校の音楽教科書の編纂や監修にも力を注いだ。

作品は西洋音楽という人類共通の財産を、日本においていかに昇華させていくかという信念のもと、その誠実さにおいては他に類を見ない。こうした信時のもとには、全国から校歌・社歌・団体歌の依頼が引きも切らず、その歌は生涯で1000曲以上を数える。

秩父郡の歌 ソプラノ独唱

蘭田真木子 プロフィール



秩父市出身。桐朋学園大学音楽学部卒業。同大学研究科修了。第12回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位。第71回日本音楽コンクール声楽部門第3位。桐朋オペラ『利口な女狐の物語』のタイトルロールにてデビューし、古典から現代の幅広い作品に出演。東京二期会公演宮本亜門演出『フィガロの結婚』スザンナ役で成功を収め、同公演『魔笛』パミーナ役、新国立劇場『修禅寺物語』かえで役（坂田藤十郎演出）でも好評を博している。秩父発信の『ミカド』ヤムヤム役では英国ギルバート&サリバンフェスティバルに参加し地元紙にて高い評価を得た。また、ちちぶオペラでは『ラ・ボエーム』『カルメン』等にて主役を務める。コンサートでは、主要なオーケストラとの共演も多数おこなうほか、（一財）地域創造登録アーティストとして国内各地において“日本のうた”を中心とした地域活動を積極的におこなっている。二期会会員。

混声合唱

混声4部合唱演奏者 (50音順)

- 浅見 和弘 (秩父郡小鹿野町出身)
- 新井 千晴 (秩父郡両神村出身)
- 門平忠一郎 (秩父郡皆野町出身)
- 齋藤 雅代 (秩父市出身)
- 高橋 薫 (秩父郡長瀬町出身)
- 富田 駿愛 (秩父郡横瀬町出身)
- 茂木 俊久 (秩父郡小鹿野町出身)
- 諸 静子 (秩父郡荒川村出身)

<出身地表記は生年時による>

ピアノ

鈴木啓三 プロフィール

秩父市出身。武蔵野音楽大学卒業。在学中よりドイツ歌曲伴奏法を学ぶ。現在、蘭田真木子氏をはじめとする多くの声楽家と共演し、好評を博している。2007年よりソロリサイタル活動を開始。2013年秋より、バッハから20世紀の音楽まで広範なテーマのもと、5年にわたり全10回のリサイタルシリーズを開催。2020年3月、ファーストCD『献呈』をリリース。

混声合唱編曲

高橋浩美 プロフィール

秩父市出身。武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。音楽教諭を務める傍ら、1991年「旅立ちの日に」（秩父市立影森中学校在任中）を作曲し、卒業ソングの定番として広く歌われる。

【主な受賞と作品】

文部科学大臣優秀教員（2007年）。第51回埼玉文化賞（2008年）。彩の国特別功労賞受賞（2011年）。「明日に向かって」「Song is my soul」（音楽教科書掲載）「きみにとどけよう」、さいたま桜高等学園校歌、埼玉県立大学歌、オーストラリアクィーンズランド補習授業校校歌など。

大塚治一 プロフィール

秩父市出身。日本大学芸術学部音楽学科作曲コース卒業。同大学院音楽芸術専攻博士前期課程修了。大学の卒業演奏会にて「秩父屋台ばやし〜Fl,Cl,Vn,Vc,Pfのために〜」を初演。